ペンテコステ講筵

聖霊・助け主・真理の御霊

2007年5月27日（京都 くに荘）

ペンテコステとは

皆さん、おはようございます。今日はよく来てくださいました。

ペンテコステ集会というのは、キリスト教会の歴史という観点から見ますと、神様の御業（みわざ）の地上における一つの締めくくりです。クリスマス（降誕節）、イースター（復活節）でしょ、そしてこのペンテコステ（聖霊降臨節）。これでいわば大ドラマの一つの幕切れになる。幕切れで、それから永遠に向かって続いて行く。そういう意味での幕切れなんですね。

クリスマスは、まさに天界におられた霊なるキリストが地上に降（くだ）って来て、我々と同じ肉の姿で歩んでくださったという、すごいことの始まりでした。それも、何千年も待ち望まれてやっと成就した。そしてそのキリストが、30年ほどの短い生涯でしたけれども、地上を歩いてくださった。それも、人の目に映ったのは、伝道を始められてほんの3年くらいです。

その最後が、見ゆる姿では、十字架という実に悲惨な結末で終わっています。ところが、その十字架が実は本当の根源的な救いの土台を作ってくださった。

この十字架という事実は、これは永遠の事実なんです。これでもう、我々の救いの根底というか、救いそのものは、神様の世界では成ってしまっている。成ってしまった現実を、

「本当にそうだ」

と確信させてくださるのは御霊（みたま）、聖霊、助け主です。そして、そのお方は真理の御霊である。このお方が我々の中に宿ったときに――霊なるキリストがマリアさんに宿られ、馬槽に誕生の声をあげられたという、それと同じように――今度は我々という器の中にその聖霊が受肉して宿ってくださる。そして、そのことによってすべてのものが見えてくる。光を放ってくる。それがなければ、起承転結の最後の止めがなければ、いくら神様の方で全（すべ）てを備えて「さあ！」と言っておられても、そこに断絶があります。聖霊というお方が皆さんの中に受肉されることによって、それがものすごく拡がっていくんです。

そういうことが歴史上起こったのが、このペンテコステ、聖霊降臨節だった。後の代に生きている我々は「聖霊降臨節」と言っていますが、当時は、昇天されるキリストが「祈っていなさい」と言われた。

「あなた方は、力を受けるまで、祈って待っていなさい」

と。何日間という約束はなさっていないけれども、それがちょうど十日目だった。使徒行伝

で先ほど読んでいただいたように、突然天から火のようなものが降って来た。天から降って来たのであって、こちらが呼び込んだのではない。

「祈っていなさい」

と言われて、ただひたすら祈っていた。十日間というのは長いですからね。十日間、もちろん泊まり込みじゃないと思います。でも、主要な間を絶えずずっと祈り続けていたら、火のごとき聖霊が降ってきた。そこから始まっていった。そういう記念すべき日ですから、我々の側から言いますと、これが最も大事なわけです。

聖霊を受ける人

神様の事態というのは、手で捕まえることができない。我々の側でコントロールできない。ヒルティも『幸福論Ⅲ』の「孫たちに幸あれ」という所で書いています。聖霊というのは神様の側からの恵みとして下さるもので、こちらで捕まえることができるようなものではない。

「聖霊をいただく準備態勢はどのようなものか」

ということを、ヒルティはちゃんと書いてくれている。

まず、砕けの魂でないと来ない。それから、自分で魂胆を持って

「聖霊を使ってやろう」

なんていう奴には絶対に来ない。聖霊というお方は人をよく見ておられる。だから、うわべ

じゃない。内側で邪心を持って、聖霊を利用しようとか、そういう者に聖霊は絶対に訪れない。謙遜の霊、つまり砕けの魂に訪れてくる。

それから、切に待ち望む者に訪れてくる。それがあれば直ちにやってくる。何の差別もない。経験年数も問題じゃない。学歴も職業も問題じゃない。生まれも――昔はどの社会でも、生まれというのは大事だった――そういうものは一切関係ない。切に待ち望むなら直ちに訪れる。そう書いてある。

それから、今度は目的のことが書いてあります。聖霊は楽をするために貰うんじゃない。

「聖霊を貰った後は楽して暮らそう」

なんて思う者はだめだ。聖霊は、働くために、神様のために働くために聖霊をいただく。人間は働くことをあまり喜ばない。なぜか。自分の力でやるからです。もうみんな、働いて疲れて死にかかっている。

「仕事は人を死ぬほど疲れさせる」

と書いてある。それはなぜか。

「自分の力でやるから。しかし、神の力の中でやる仕事は違う。それはかえって人に生気を与える、働くことによって人は健やかにされる」

ということをヒルティは言っている。

「神のために神様のお役に立つことをやらせていただくという、本当の神の僕とし

ての働き、これは楽しい。人がなぜ精神的あるいは肉体的な病気に罹(かか)るかというと、そこのところが正しく受けとられていないからだ」

と。当時は、貴族とか貴婦人にそういう傾向があったようです。「それは働かないからだ」ということをヒルティは言っている。「働かせてください。神の国のために働かせてください」という角度、まさにキリストがそうでしたもの。

「父よ、御意(みこころ)を成してください。私をお使いください」

「私は自分からは何も言っていない。何もしていない」

と、キリストはそうおっしゃった。

「みんな、父なる神様が私（キリスト）の中で『せよ』とおっしゃることに委ねているだけだ」

と。責任を取り給うのは神様であって、

「あなた方は気に入らなければ神様に向かって怒るべきであって、パイプ役で単なる僕(しもべ)に過ぎない私を捕まえてどうするんだ」

と、キリストはおっしゃったでしょ。ヨハネ伝を見てごらんなさい。

「神の子たち、そういうキリストの霊を受けた者たちを迫害することによって、自分たちは神様に仕えていると思いこんでいるなんて、とんでもないことだ」

と書いてあります。それは、まさにパウロがそういう姿だった。キリスト教徒を迫害すること

が神様に喜ばれると思っていた。キリストは異端者でしょ。旧約以来の伝統を破って何か新興宗教まがいのものを広めようとする破壊者。せっかく営々と築き上げてきたものを根こそぎ崩して、

「遊女、罪人(つみびと)、そのような者が無条件で救われるなんて、おれたちの立場はないじゃないか」

と、迫害者たちは「おれたちの立場」を主張したわけです。

キリストには、御自身の立場は何もない。何者でもない。

「幸いなるかな、霊の貧しき者」

です。霊において「これがありますよ」と誇るものは何もない。

「私は空っぽです。私は何者でもありません」

そう言っている者に、神様が御自身の霊をいっぱいに注ぎ給うた。

キリストの受洗

前にも申しましたように、キリストがヨルダン川で悔い改めの水のバプテスマをヨハネから受けてくださった。それ自体が何と謙虚(けんきょ)なお姿か。悔い改めを必要としないお方が、我々に代わって、そこで悔い改めをしてくださった。

我々の悔い改めなんて表面的なものでしかありません、肉であるかぎりは。それをキリス

トは霊において、本当のそういった悔い改めの姿を現してくださった。そこで本当にぶっつぶれてくださっている。

「神様、あなたの前に、私は何者でもありません」

と、それを現してくださっている。その姿を見て、神様は喜ばれたわけです。未だかつてこのような人はいなかった。そこまで徹底的に己を空しくして神様の前にぶっつぶれている貧しき霊。「貧しき霊」というのは、さもしい根性の霊じゃないですよ。そういうのじゃない。この点、日本人はみんな誤解しています。

「あいつ、霊の貧しいやつだなぁ」

というのは、さもしいという意味で使っていますが、キリストの場合はそうではない。

「私は何も持っていません。神様、あなたがすべてです」

と。そこまで明け渡した霊。真空ですよ、それが「霊が貧しい」というすがた。そこに神様の霊が百%臨んできた。それがキリストに臨んだ聖霊のバプテスマです。

「汝は我が愛する者。我が心に適う者」（マタイ3・17）

あれを、小池辰雄先生は「会心の者」と訳された。私たち、「会心」という言葉をどのような時に使いますか。「会心の一打」とか、ボールが165メートルも飛んで行くとかね。寸分のズレも無く、ボールにバットが物理法則的にも最高のぶつかり方をするというのが「会心の一打」です。そのようなものは、プロ野球の選手でも一生に一度しか出ないようですけれど

も。神様はキリストに対して、

「お前こそ我が会心の者だ」

と言われた。一期一会。もうそのような者は二度と現れないというくらいに喜ばれた。だから、天が開けて聖霊がサーッと降ってきた。

我々には、聖霊はなかなか降ってきてくれません。我々はみんな自己があるからです。みんな己がある。大体、世間で腹が立つ時というのは、自己を否定された時です。

「顔に泥を塗ってくれたな、侮辱してくれたな」

というのがそうです。誇りが無いというのでは人間じゃないですもの。その誇りを傷つけられたら怒るのは当たり前です。でも、神様の前には何も誇るものが無い。人に対するのと神様に対するのは区別しないとね。人に対しては怒ったっていい。でも、神様に対しては何も無いです。

聖書を読むということ

日本の方々が聖書に親しめないのは、日本人は相対的なものの中で生きるのが好きなんです。白でもない、黒でもない。ファージーとかいう。

「あんまり決めつけるなよ。ヨーロッパの人たちはマルかペケか、決めつけすぎる」

という。マルでもない、ペケでもない、じゃあ三角かと言えば三角でもない。

「何だか訳がわからないが、でも何となく好きだ」

というような人間にとっては、聖書の世界は絶対次元をグッと指し示してくるから、絶対次元というのは手でつかむことも感覚的につかむこともできないから、お手上げなんです。しかも、聖書は言葉で切り込んできますでしょ。言葉だから、我々は「わかる」と思って読んでしまうけれど、ところが実はわからない。だから、日本人は聖書を読んでイライラする。

それなら仏典はどうかと言えば、難解すぎてわからないから、かえって神々しくありがたく思える。それに、悟りを開くために座禅を組んだり、千日回峰のような行をしたり、我々の日常の次元でないものの中に本ものがあると、そのように受けとっておられるのだろうと思います。そして、そのような感じ方というのは、日本人には割合しっくり来ているようなんです。どれだけの人が本気で、命がけで悟りを求めているかはわからないですけれども。

キリスト教の方で、

「ええ、聖書を読みましたよ」

なんて言うのを私は信用しない。聖書を本気で読んで、そのままの姿で居られるはずがない。本気で読むというのは、そこで語られていることが受肉することですから。受肉するまでは「読んだ」ということは言えない。表面をなぞっただけで、お習字の稽古をする時に模範のお手本をなぞるように、聖書の表面をなぞっただけで、そういう形で表面的に聖書を何回読んだって、それは読んだことにならない。本気で、ひと言でも本当にそれを体受、体得した

ら、それは生命なんです。

「我が言は霊なり、生命なり」（ヨハネ6・63）

と。ひと言が本当に受肉したら、その人はそこで変わるはずなんです。小池先生にとって、そのひと言とは、

「恵福なるかな霊の貧しき者。天国はその人のものなり」（マタイ5・3）

それがもう決定打になって、そこで天が開けたんです。小池先生は、

「聖書をからだで読め」

ということを言われた。

「本当に霊なる生命なる聖言があなたの中で受肉して化体するまで止めるな」

と。私は長年この道を歩んで来たけれども、本当につくづく思います。聖書の語っている世界というのは深くて――これは、どだい我々人間には無理なことを語っている。つまり、肉なる人間、生まれながらの人間には普通なら達し得ない別次元の世界のことを語っている――別次元のことなんだから、無関係で終わっていれば楽なのかもしれません。でも、別次元なのに、

「ここへ来い」

と誘いかけて来ている。引っ張り込もうとしているんですよ。

「本ものの世界に入り込め。生まれたままのあなた方で居たのでは、これはあまり

にも淋しすぎる。空しすぎる。そんなものじゃないよ」

「じゃあ、どんなものですか？」

と言ったら、

「こうなんだ」

と語ってくれていることが、霊の言葉で語られている。それで、我々は聖書が語っていることがつかめない。小池先生はある時、

「聖書は全部、暗号ですよ」

と言われました。暗号、シンボル（徴）です。人間の言葉で語られているけれども、我々の通常の日常会話の言葉ではないんです。それは、何とかそういう形で表現したいから、無理矢理に言葉で表現しようとしているだけのことであって、その言葉を分析したり辞書を引いたりして理解できるような代物ではない。だから、パウロも、

「霊なる人は霊のことを理解する。肉なる人は霊のことを理解できない」（コリント前2・13～14）

と言っています。

「霊を受けた人は、霊のことには霊の言葉を当てる。それでコミュニケーションができる」

ということですね。そういう角度から見て、「なるほどなぁ」と私は妙に悦に入っている。

悦に入っているというのは、わかったということじゃないですよ。

「深いなぁ。絶対次元だなぁ」

ということです。絶対次元からの語りかけ、しかもそれは愛の語りかけなんです。生命を与えようとして、本当にもう必死になって向こうから語りかけている。それを我々の側は横を向いているんですよ。

我々に生命を与えるため、本当の意味の恵福を我々に与えようとして、向こうの世界から必死になって語りかけてくれている愛の言葉、それが聖書なんです。そういう角度から受けとらないとね。

「聖書は教訓が書いてある、何々すべし、すべからずが書いてある」

とか、そんなんじゃない。「すべし、すべからず」は自ずから出てくるもので、

「霊なる人の生き方は、自ずからこうならざるを得ない」

という姿を聖書は描いているわけです。神様の霊を受けた人間が憎み合うなんて、あり得ない。神様の霊を受けたら、神様の霊は「愛」なんですから、愛し合わざるを得ない。

「だから、こうだよね。もう人の欠点なんか咎めるなよ」

と。そういう形で自ずと出てくる。それは結果なんです。結果というか、

「当然こうならないでは居られないよね」

という、そういうことが出てきている。それを教えだとか戒律だとか、そういうふうに受け

とると、何か非常に不自由な感じがしますでしょ。本当に大事なことは、

「神様が与えようとなさっているものを、まず受けとりなさい」

ということです。神様が与えようとなさっているもの、それがこの聖霊なんです。聖霊の役目は「助け主」、そして聖霊の内実は「愛」なんです。これはヨハネ伝の14章、15章に出てきている言葉です。

目に見えないものこそが大切

同志社大学にキリスト教文化センターというのがあって、「チャペルアワー」というのをずっとやっている。その所長さんからの依頼で、そこでお話をすることになりました（２００７年7月4日同志社大学水曜チャペルアワー「信・望・愛――見えるものでなく、見えないものが大切」）。「人生にとって大切なこと」というのがこの春学期のチャペルアワーの共通テーマなんです。それに相応（ふさわ）しい題で話してほしいということです。だから、私はいろいろと考えた。私にとって大事なものは、やはり「信・望・愛」。コリント前書の13章に出てきます。

「信仰と希望と愛、この三つはいつまでも残る。その中で最も大いなるものは愛である」（コリント前13・13）

と。でも「信・望・愛」だけでは抽象的でちょっと物足りない。それで私は、副題を

「目に見えるものでなく、目に見えないものこそが大切」

としました。コリント後書に、

「我々は見えないものに目を注ぐ。見えるものは一時的であり、見えないものは永遠に続くからである」（コリント後4・18）

そして、その少し前のところには、

「我らが外なる人は壊（こわ）るれども、内なる人は日々に新（あら）たなり」（コリント後4・16）

とあります。

「この肉体の幕屋が壊（こわ）れれば天に備えてある朽ちない永遠の家を賜（たま）わる。備えられる。もうその時は裸（はだか）ではないよ」

ということです。これはこの世を去る時のことを書いてありますけれど、それ以前に、

「我々は地上において何を見、何を目標にして歩いて行くか」

それが大事です。現代という社会は、もう、見えるものばかりにとらわれている。

「見えるものがすべてである」

という前提のもとに行動している。それは自然科学の閉ざされた世界です。自然科学の世界というのはどんなに小さな物でも顕微鏡で確かめたりとか、遺伝子だって何だって全部かつては見えなかったけれど、見える形で姿を現してきたわけです。結局は「見えるもの」です。

天と地

見えるものというのは、「天」と「地」ということで言いますと、「地」の次元なんです。これを聖書は「肉」とも呼んでいます。

生まれながらの我々の存在、そしてそれを包んでいる世界、それは全部「見えるもの」の世界なんです。この見えるものだけでも広大なものです。天文学もあれば物理学もあれば——それでたくさんのノーベル賞も出ているし——この自然科学的な世界だけでも大変なものです。人間はこれを究極的なものだと思って追求しているわけです。でも、神様の次元というのは別次元なんです。

「この地のものをいくら微に入り細に入り深く広く追求しても、それと天の次元は
ちょっと違う。あなた方はいったいどちらに目を注いでいるのか」

ということを聖書はいつも問いかけてきている。我々、自然の、生まれたままの人間は全部「地」のことを見ているわけです。ところが神様は、

「こちらを向きなさいよ」

と向こうから呼びかけてきている。呼びかけてくださらないと、我々は気付かない。呼びかけもないのに勝手に気付いて、「天」の世界に深く入っていくなんて——たまにはそのような人もいるかもしれないけれど——一般にはそうじゃない。呼びかけられて初めて気付くんです。呼びかけられてもなかなか気付かない。

我々、肉なる人間というのは、ひと皮剥けないといけない。ひと皮剥けて目が開かれないと見えない。エマオ途上の弟子たちがそうでしょ。旅人の姿で復活のイエスが近づいて来た時、旅人を見ていた。ところが、パンを裂いて与えてくださる、祈られる姿に、

「あっ、イエスだ！」

と思った時にもう見えなかった。お姿が見えなくなった。復活のイエスが、旅人という見える姿で現れたとき、旅人として見たんだけれど、それは実は「見えるもの」だった。その奥にある見えない「本当のキリスト」という御姿は、霊の目が開けたその瞬間にもう見えなかった。内に宿られたからね。それで、弟子たちは直ぐにエルサレムにとって返して他の弟子たちに報告しました。あれが非常に象徴的に表していると思うんです。

「何を見ているのか。あなた方は何を見ているのか」

と。イザヤ書に、

「民は見れども見ず、聞けども聞かず」

と書いてあります。そういう角度から聖書を見ますと、私たちは常に「地」のことを思い、「地」についての思いで「天」のことも理解しようとする。だから、たとえ「天」からの呼びかけがあっても、我々自身がひと皮剥けて霊の目が開かれないと本当のものは見えない。神様は「天」の次元ですからね。

小池先生は、『ファウスト』の論文のはしがきのところに、

「聖書は、闇を光に変えようとして絶対次元から語りかけている神からの語りかけ、絶対次元から切り込んできたそういう語りかけが聖書である」

という趣旨のことを書いておられます。

「闇を光に変えようとする神の本願のつかみかかり、そういった角度で聖書を受けとらないと、聖書は読めない」

ということを論文の冒頭に書いておられます。論文の内容は『聖書の光から見たゲーテのファウスト』という。このような論文を書くのが職業だったら楽しいだろう。それに引き替え我が民法は（笑）と思いました。でも、今、私は後悔していません。法律学をやったことは良かったと思っています。法律学のしっかりした論理で聖書をしっかり受けとって行く。どちらも法の世界、法則ですから。文学は感性の世界です。感性の世界だけれど、それを聖書の光で見る。人間の醜いものをいくら微に入り細にわたり書いたって、それだけでは何にもならない。やはり光がさしこんでくるような文学であってほしいというのが私の願いです。

聖書はまさに「天」からの語りかけなんです。こういう角度をしっかり理解する。そこから始めないと、入り方が間違っていたら、扱い方が間違っていたら、いくら年月をかけてもだめでしょう。じゃあ、どういうところからそう言えるのか。このあたりから聖書に入りましょう。

新しく生まれる

ヨハネ伝の3章にニコデモとの対話があります。この場面はもう皆さんの頭の中にあると思います。私が話すことは大体、もう皆さんの頭の中にあることをまとめ上げるだけの仕事です。ニコデモとの対話のときイエスは、

「**人は新しく生まれなければ神の国を見ることができない。神の国に入ることもできない**」

と言われた。これに対してニコデモは、

「**お母さんからもう一度生まれるのですか？**」

と。イエスは、

「**いやちがう。人は水と霊とから生まれなければだめだ。新たに天から生まれさせていただかなければだめだ**」

ということを言われた。聖書を確認しましょう。私のは文語訳なのでお許しいただきたい。

「**人あらたに生まれずば、神の国を見ること能わず**」（ヨハネ3・3）

「**人は水と霊とによりて生まれずば、神の国に入ること能わず。肉によりて生まるる者は肉なり、霊によりて生まるる者は霊なり**」（ヨハネ3・5）

「肉によって生まれる」というのは、我々が「肉」の人、この見ゆる次元で生まれた第一の誕生のことを言っています。「霊によって生まれる」というのは第二の誕生です。別次元へ

と生まれる。別次元に属する者として生まれる。これが大事だと。これは「霊」によって生んでいただく。私たち自身、自分で生まれて来たんじゃなくて、親に生んでいただいたわけですから。でも、もう一つ新しく生んでいただかなければならない。これが「霊によって生まれる」ということです。キリストは、

「新たに生まれなくてはいけない、と私が言ったからとて、驚かなくていい。風を見てごらん。風がどこから来てどこへ行くのか誰もわからないけれど、風は確かに存在している。霊によって生まれる者もそのとおりだよ」

「いつどこで生まれて、どこへ行くのか、そのようなことはわからない。でもリアリティである」ということ。そこでニコデモがいろいろと戸惑いましたので、イエスは言われました。

「私は自分が見聞きしたことを証言している。

イエスは天の次元を見、天の次元を聞き、その中に生きておられましたから。

私は天の次元のことを語っている。けれど、誰も受けとらない。地上のことを言ってもなかなか受けとってもらえないのだから、天上のことを言っても受けとってもらえるはずがない」

ということをおっしゃった。

「天から降ってきた者、すなわち私（イエス）の他に誰も天に昇った者はいない」

（ヨハネ3・13）

それから次に十字架のことが出てきます。「青銅の蛇」は十字架の象徴でした。

「私もそうだよ。すべて信じる者が之によって永遠の生命を得るためである」

と。十字架がここに隠されています。

「青銅の蛇、それを仰ぎ見た者は皆癒された」

という記事が民数記にあります。

「そのように私（イエス）も挙げられ、十字架に架けられ、それによってあなた方は癒され、そこから生命が流れてくる」

と。そして、

「神はその独子を賜うほどに世を愛してくださった。すべて彼を信受する者が滅びないで、永遠の生命を得るためである」（ヨハネ3・16）

御霊は永遠の生命

ヨハネ伝では「永遠の生命」という言葉がずっと出てくるんです。この「永遠の生命」という言葉は――全部とは言いませんが――所々これを「聖霊」それから「御霊」と置き換えてみたらすっとわかることがあります。

「永遠の生命」とは何かと考えてごらんなさい。御霊は永遠の生命です。滅びない。リアリティなんです。このキリストの霊があなた方ご自身の一人ひとりの霊と合体してくださる。

ちょうどマリアさんに聖霊が受肉したように、あなた方の内なる霊とこの聖霊というお方が一つになられる。これはもう死なない。必ず天に向かって行かざるを得ない。天から来た霊ですから天に帰る。我々だけだったら、これは地から出た霊ですから地に帰って行く。「お墓の中で永遠に安らかにお眠りください」と言ったって、ちっとも安らかじゃない。やはりキリストの霊で上に引っ張って行っていただく。光輝くところに引っ張って行っていただく。それが永遠の生命なんです。

「永遠の生命を与える」

というのがキリストの祈りです。そのキリストの「永遠の生命を与える」という願いは、神様の祈りであり、願いなんです。キリストは神様から遣わされてやってきた。

「私を遣わされた方の御意は、私を信じる者がひとりも滅びないで永遠の生命を得、終わりの日によみがえる、是なり」（ヨハネ6・40）

「私のところに来た者はひとりも失わない」

「父が呼び寄せてくださらなければ、誰も私のところに来ることができない」

とおっしゃった。そういうキリストの霊と一つにされて、そしてキリストの御国へと引っ張って行っていただく。

あの気球というのは、炎が燃えると上に上にと昇って行く。あれは、火が燃えているから空気が軽くなって上に昇って行くんでしょ。それと同じように、この聖霊という火、生命、

それが皆さんと一つになると、これはもう上へ昇って行かざるを得ない。滅びない。常に新しく現在なんです。そういった永遠の生命。それを約束してくださる。それから、

「上より来るものは凡ての物の上にあり」（ヨハネ3・31）

天の次元のものは隔絶したところにいらっしゃる。イエスというお方、天より来た方、この方は見たこと聞いたことを証しておられるのに、誰も証を受けとってくれない。肉なる者は天の次元のことはわからない。受けつけないんですから。しかし、その証を「然り」と受けとった者は、「真に神は真実なる御方だ」ということを証言する者となる。

信じるということ

「父は御子を愛し、万物をその手に委ね給えり。御子を信じる者は永遠の生命を持つ」（ヨハネ3・35）

「御子を信じる」というのは御子の中に帰依帰入すること。信じるということは帰依帰入することを言います。全托する。預けてしまうことです。自分自身を預けてしまう。こちらには何も残らない。それが「信じる」ということです。信じるというと、何か大変なことのように思いますけれど、そうじゃない。預けてしまうんです。自分ではもう自分のことをとやかく思わない。もう全部お預け。任せてしまう。楽ですよ。

私は、家のことを全部、家内に任せてある。何も知りません。お金がどうなっているの

か、保険がどうなっているのか、何も知らない。だから、「世を去る時は全部書いておいてね、困らないように」と家内に言ってある。どちらが先に逝くかわかりませんからね。もう、本当に任せたら楽です。そのかわり一切文句は言わない。任せて文句を言う奴がいちばん悪い。文句言いたければ任せなければいい。

だから、キリスト様を、主を信じるということは、もう全部任せてしまう。これはそのお方が素晴らしいということがわかっているからです。キリストというお方がいかに素晴らしいか。それは、福音書のキリストの姿を見たら、我々だってわかります。こんな素晴らしい方はいらっしゃらない。そういうお方に自分自身を任せる。そしたら後は全部その方がやってくださる。そういうことになっているんですから。その方は永遠の生命、聖霊、それをくださるわけです。

二重性を貫く本質

「本当の礼拝者が霊と真をもって父なる神を礼拝する、その時がもう来ている。父はそのような者を求めておられる」（ヨハネ4・23）

「神は霊であるから、拝する者も霊と真とをもって拝すべきである」（ヨハネ4・24）

我々は地上では「肉」なんです。霊魂というのはありますよ。でも、霊魂も結局はやはり「肉」

です。「肉」というのは、肉体という意味じゃなくて、「地上の生まれながらの姿」という、それくらいの意味です。だから霊魂だって、神様の御霊とくっついてもらわない限り、結局は「地」に属するものなんです。「肉」というときに、肉体を表していることもあるし、「地に属する存在の姿」そのものを表していることもあるし、そういった二つの使い方をしていますので、時々ごっちゃになりますけれども。霊魂だって地に属している、そういった姿を「肉」と呼んでいるわけです。

そういったものでは「天」とは関わりがない。御霊は「天」でしょ――神の霊は御霊――これが引き上げてくださらないと。これが降ってきて我々の霊と一つになって、そして御自分のところに引き上げて行ってくださる。そうすると、「天」の次元の人間、「天」に生きる人間になる。地上に居ながら同時に「天」の次元に生きるという、二重性が出てくるんです。

一重性で生きているときは、ある意味で楽なんです。しんどいけれど楽かもしれない。おもしろくないかもしれないけれども。一重ですから、暗いなら暗いまま。「ネアカ」という人は一重でもニコニコしているかもしれないけれども、それはこの地上の次元のことです。

それが「天」の次元に生きる、それも肉体を宿としながら「天」の次元に生きるとなると、どうしたってそこに葛藤が出てきます。生きている限り、肉なるものは滅びていませんから。しかし、神様の根源現実では、肉なるものはもう無いんです。

「我、主と偕に十字架せられたり。もはや我、生くるにあらず」（ガラテヤ

2・20）

神様の根源現実においては、もう十字架で成ってしまっている。だからもう、あなたの旧（ふる）いものは無いんです。神様は、

「お前はもう居ない。お前はもう十字架で死んでいる」

と言ってくださっている。こちらは、「いいえ、まだ肉体はあります」と言っているわけですね。でも神様は、

「いや、お前は死んでいるんだ。お前は、自分自身を見たら『生きている』と言うけれど、ほら、こちらを見てごらん。神様の帳簿ではもう死んでいるんだ」

とね。神様の帳簿では、もう死んだことになっている。

「じゃあ、私は生きているんですか」

「ああ、生きている。御霊（みたま）を受けとったら生きていることになるよ」

御霊を受けとったら、本当に生きる。御霊を受けとるまでは、生きるすべをまだ知らないから、本当は死んでいるのに死んでいることに気付かない。本当に死んでいることに気付いたら、直ちにそれは生きることになる。そういう、何ともわかりにくいことをいろいろ語っているのがパウロ書簡です。ロマ書、コリント書、ガラテヤ書、エペソ書、みんなそうです。

「あなた方は既に死んだ者である。その生命はキリストとともに神の中に隠されている」（コロサイ3・3）

「我、主と借に十字架せられたり。もはや我、生くるにあらず。キリスト我が内に在りて生くるなり」（ガラテヤ2・20）

「私が今、肉体に在って生きるのは、私のために十字架に架かってくださった御子（みこ）を信じるによる」（ガラテヤ2・20）

そういう二重性のことをずっと言ってます。だから二重性を否定する必要はない。けれども、

「あなたの本質は、もはや、地の人ではない。天の人になっている。霊の人に転換されているよ」

と。先ほどのヨハネ伝では、

「人新たに生まれずば」

と、将来のこととして語られていますが、パウロ書簡では、

「新たに生まれるための土台、それをもう作ってしまった。もう、あなたはこの十字架で死んでいる。旧（ふる）いあなたは十字架で死んでいる」

と。神様がそうおっしゃっている。神様がそうおっしゃっている以上、こちらが「そんな気はしないわ、そんなの、私の現実に反するわ」とか言ったって、通用しない。神さまが、「こうだ」と言われたら、それは絶対なんです。絶対次元からの語りかけは絶対です。「愛しているよ」と言われたら、絶対なんです。我々は相対ですから、「ああかもしれない、こうかもしれない」と、フニャフニャしてますけれども、神様の御言（みことば）というのは貫くんです。しか

も、それは愛なんです。生命を与える言、そこに帰依帰入し全托していくか、それともこの地上の生まの現実の中に沈潜するか。

己を見たら、生まの現実。でも、神様の方ではちゃんと新しい生命ができあがっている。単なる青写真ではない。既にできあがっているものがグッと降りてきて、我々と一つになる。聖霊を受けるときに、このことが成就していくんです。だから、

「聖霊をください」

という祈りが大事なんです。御霊によらなければ本当に、「イエスは主なり」という告白はできない。御霊をいただいている人間は、「イエスは呪われよ」なんて絶対に言いっこない。聖霊がすべてのことを教えてくださる。祈れない人間を助けてくださる。聖霊ほどありがたいお方はいらっしゃらない。その聖霊を一人ひとりに与える。またキリストは聖霊という姿で宿る。そのために十字架に架かってくださった。

だから、どうぞ、あまり頭の中で考えようとしないで、

「あ、そういうことなのか。天からの福音というのはそういうことなのか」

と、そういうふうに受けとってください。

「霊」と「肉」

聖書をもう少し読みながらいきましょう。ヨハネ伝6章のところです。

「生きておられる父が私をお遣わしになり、また私が父によって生きるように、私を食べる者も私によって生きる」（ヨハネ6・57）

「食べる」というのは一つになることです。体の中に消化してしまうこと。これも暗号ですね。

「キリストを食べる」

なんて、霊的な事態をこういう言葉で表しておられるだけで、

「私を本当に内に宿す者、食べてしまう者、その者は生きる」

ということです。それから少し先に行きまして

「活かすものは霊なり、肉は益するところなし」（ヨハネ6・63）

ここでの「肉」と「霊」というのは、地に属するものは「肉」なんです。地に属する世界からは本当の生命は生まれてこない。ここで言っている「霊」というのは、霊魂の霊じゃありません。ここで言っている「霊と肉」というのは、決して「霊魂と肉体」という意味じゃない。霊という本質、霊という生き方のことです。先ほど

「見えるものと見えないもの」

と言いましたが、本当はそれだけじゃ足りない。見えないものが全部よいかと言うと、そうじゃない。悪霊というのは見えない。

だから、単に「見えないもの」というのではなく、光輝く世界、光の世界、生命の世界、神様の世界、そこに充満しているもの。その本質は、人を生かすというか、神中心であって

人を生かすという、非常にプラスの面です。生命づけてくれるもの。これは神様の御思いです。こういう在り方、存在、次元、それが「霊」とか「天」とか言われているものです。天的なそういう生き方、これが人を生かす。

「地」の生き方、この地上の生き方、生まれながらの我々人間の生き方、それに従って生きる生き方、これを「肉」と言いますが、これは決して生命には至らない。これは結局は、死とか滅びにつながってしまう。だから霊の生き方をしなさいという。

霊の生き方は、神様を讃え、神様の中に生きる、神様に全托している生き方です。その時、生命が流れ込んできて、神様と等しい生き方をさせてくださる。だから、人を生かすのは霊という次元での生き方です。肉の次元の生き方ではない。

このあたりのことは翻訳できない。翻訳したり概念規定したりできないと思います。聖書の言葉というのはみんな、概念規定とか翻訳をしたら、限定されてしまう。だから「肉」とか「霊」とか言っているだけなのです。そういう、何となくわかったような感じがしませんか。

「ああ、なるほど。霊の生き方、天の生き方、神様の生き方は、光と生命にあふれて輝いている生き方だな。それに対して、こちらは闇の生き方、憎しみ合う、ぞっとするような生き方で、これが地の生き方なのだな」

と。目に見えない、しかし光り輝いている、そういう生き方。

「私の言は霊なり生命なり」

と言われた。体でわかった感じになりましょうよ。頭で一生懸命に概念規定をしたってダメ。私も、概念規定をしようと苦労しました。でも、それは所詮無理だということがわかりました。「天」のことには天の言葉しか当てはめられない。パウロが第三の天にまで引き上げられて、そこで人間の語る言葉でない言葉を聞いてしまった。それを人間の言葉に翻訳はできない。そういうことを言っているんです（コリント後12・2～4）。

ですから、皆さんも何となくあこがれる。

「何となく嬉しくなる。光だなぁ、何となく体でそういうことがわかるなぁ」

と、そういうことで結構ですから。

大事なのは、そういうものが実在するということ、これを信じてほしいんです。「天」の次元は実在界です。「地」の次元は、現象界ではありますが、現象界というのは滅びに向かっていますから、現象界には永遠のものは無いんですね、残念ながら。だから「地」にとどまっていてはダメ。現象界、見ゆるもの、地の次元、肉の次元、そこに希望は無い。

「地の次元に希望を探すのは、死人の中に生ける人間を捜すのと一緒だ」

と、キリストの復活された時に天使が弟子たちにおっしゃったでしょ。

「何ぞ、死せる者のうちに生ける者を探すか」（ルカ24・5）

と言われた。

「死人のうちに生ける者を探したって無理だよ。生ける者は生ける世界に住んでい

るんだから」

と。だから、私たちは不思議な存在なんです。

「朽ちるもので播かれ、朽ちないものによみがえっていく。朽ちないものへと生まれ変わっていく」

と。そしてそれをいただく。そういう尊い存在なんです。「地」だけで終わる存在じゃない。

執り成しの祈り

「肉」の次元というのは、人を憎んだり、理由なく迫害したりする。ヨハネ伝にも出てきます。

「世があなた方を憎むなら、あなた方を憎む前に私を憎んだことを覚えなさい。私があなた方を世から選び出した。だから、世はあなた方を憎むのである」（ヨハネ15・18〜19）

この「世」というのは「地」に属する世界。あなた方は「天」に属するものになってしまった。地はなぜか天を嫌がるんです。あなた方がもし世のものならば——世というのは地ですよ、肉ですよ——あなた方が世のものであり続けてくれれば、世はあなた方を歓迎する、「ああ、仲間だ」と。ところが、天のものになってしまうと、これは異質物なんです。拒絶反応が起きる。異質物だから拒絶反応が起きる。

「肉なるあなた方を、私（キリスト）は本質的に霊の次元に引き上げてしまった。

だから、この世はあなた方を理由なく憎む」

と。「理由なく」憎むんです。続くヨハネ伝15章25節を見ますと、

「私（キリスト）が本当のことを語らなければ、まだよかった。でも、私は本当のことを語り、彼らはそれを否定した。だからもう、その罪は言い逃れができない。私を憎む者は父をも憎む。私が神の業を行っていなければ、まだよかった。しかし、私はもう神の業を示した」

「今や、彼らは我をもわが父をも見たり、また憎みたり。これは彼らの律法に『人々は故なくしてわれを憎めり』と録したる言の成就せん為なり」

とあります。

ですから、肉親に嫌われたり肉親から故なく迫害されたりしても、不思議に思うことはない。肉親も、なぜそうするのか自分でも気付かないまま迫害することが、いくらでもある。異質物なんです。合わないんです。ひとりの人をめぐって、肉なるものは自分の方に取り込もうとする。霊なるものは霊の方へと引き上げようとする。そのぶつかりあいなんです。それで、理由なく迫害する。自分では克服できない。そういう確執が生じる。この確執は、お互いが霊の人になれば消える。相手に「まず霊の人になれ」と言う前に、自分が霊の人になる。自分が霊の人に変われば、相手の肉を背負って行ける。パウロも、

「自ら復讐せず、あなたは善をもって悪に勝ちなさい」

ということを言っている。

人間関係で、同じ次元でぶつかれば、これは永久に片は付きません。自分の方が神様の霊をいただいて、神様の霊は肉の力より強いですから、それで執り成していく。「どうぞ、あの人も光の世界に入れてあげてください」という、執り成しの祈り。これが大きいんです。執り成しの祈りをするようになれば、その人は本ものです。これはキリストの霊がなさってくださることなんです。キリストの霊は執り成しの霊なんですね。だから、キリストの霊をいただかないで、

「迫害する者のために祈れ」

なんて、これは無理な話です。キリストの霊は執り成しの霊だから、キリストの霊をいただいた人は、

「キリストの霊と一緒に執り成そうよ。私たちはどう祈っていいかわからないけれど、御霊は言い難きうめきをもって執り成してくださるんだから」

となる。すべて御霊のせいにしたらいい。己のできないことは御霊が全部してくださる。だから「御霊を下さい」と、こうなってくる。

「御霊を下さい。御霊を下されればすべて道は拓けて行きますから御霊を下さい」

という祈りになる。祈りが御霊を呼び込む。「誘い水」と言ったらわるいけれどね。

祈りとは

「祈り」とは何かというと、帰依帰入、全托、これなんです。祈りというのは、目をつぶって本当に、「主よ！」と、主の御姿を思い浮かべて、主の十字架を思い浮かべて、そこに、「自分をお預けします」という。見えない世界を見えるように、そこに再現していく。そういう一つの営みだと思う。「あれをしてください、これをしてください」とおねだりするのが祈りじゃない。

本当の愛の神様、我々を愛して愛してやまないでっかい愛の神様。その出店として、イエスは我々の前に立ってくださっている。そして、

「お前を愛しているよ。お前を愛している。お前の罪は全部消した。全部私が背負った。大丈夫だよ」

と言ってくださっている。そのお方に、

「はい、そうでした。私は今まで眠っていました。今まで私の目は覆われていました。しかし、あなたの御姿を見れば、もう、ありがたくて、ありがたくて。どうぞ、あなたと一つで居らせてください。あなたは、『お前のところに降って行く。おまえと住みかをともにする』と。ヨハネ伝にはそういったありがたい御言があふれています。どうぞ、そう成らせてください。本当にあなたと一つで在らせてください」

というふうに、御言に従って、その御言の成就をお願いしていく。お願いというのは、

「御言の成就が、この身に成りますように」

ということです。それを、人の居ないところで、人を隔てて、隠れたるところでお願いする。人が居ても人の存在を感じなければそれでいい。小池先生は、

「満員電車の中でも目を閉じれば、そこは深山幽谷だ。『主よ』と呼べば、そこは聖霊の世界だ。『主よ』というひとことで自分は十分だ。『主よ』というひとことで御霊が全身に満ちてくださる」

と。そういう境地に入っておられた。ですから、祈りというのはまず、神様、キリストの側が与えたくて与えたくて仕方がない。向こうが求愛しておられると思ってください。その求愛、プロポーズに応えるわけですよ。そうしたら、

「やっと気付いたか。お前が生まれる前からお前を愛していたんだ。お前を呼び続けていた。そうだったのだよ。わかったかい。おお」

そう言って抱きしめてくださる。霊の次元でのそういった一体感、愛の一体感。これを神様は願っていてくださるんです。

キリストの熱愛

神様は、私たちを滅ぼそうなんて、そんなことじゃない。何とか生かしたい。サタンという霊力、闇の世の主権者、このサタンという、神とキリストに敵対する霊力、これがな

かなか手強くて、こちらが眠っているといつのまにか虜にしている。さらって行く、拉致していく。そうなると、神様はサタンの許から我々を取り戻さなければならなくなる。

だから、願わくば、そのようなものに拉致されないよう、絶えずキリストの守りの中に隠れて、キリストを隠れ家として、

「主はわが避け所、神はわが避け所、また力なり。なやめるときのいと近き助けなり」（詩篇46・1）

そういうふうにして、いつも主キリストの中に自分のからだを預けて、その中で

「主よ、主よ！」

と呼ぶ。そして、

「どうぞ御霊を下さい。御霊があふれてくださらなければ、私はやっていけません。御霊が来てくだされば、私の心はいつも穏やかで居られます。苛立つことも、人に対して腹を立てることも無くなります。でも、あなたが、御霊が、希薄になれば、心にムクムクと憎しみが湧いて来るということになってしまう。そういう世界はもう嫌なんです」

と。肉なる世界にだけ居たら気付きませんけれど、そこからいったん脱出して滑らかな世界を知ってから、また後戻りしたら、嫌ですね。煙草呑みは、煙がモウモウでも気付かない。でも、いったん禁煙した後に煙の中に行くと、苦痛でいたたまれないそうですね。たとえ

て言えば、そのようなものかもしれません。

我々は「肉」なる世界から贖(あがな)い出されたんです。贖い出してくださったんですよ。コロサイ書に書いてあるように、我々を闇の世界から光の世界に移してくださった。だから、二度と闇の世界に戻ってはいかん。

ここで私が話すことは、本当に断片的なことですよ。5時間も6時間もあればもっとすべてお話したいけれども、それはできないから。でも、そういう角度からヨハネ伝、ロマ書、コロサイ書、すべて読んでごらんなさい。何という神様の、キリストの熱愛がそこにこめられていることか。「ああ、ここまで思われているのか」ということを思います。

ヨハネ伝に隠されている十字架

ヨハネ伝の16章7節でイエスは、

「私が去ることはあなた方の益になる」

と仰っています。この時、弟子たちは非常に憂いに満たされている。けれどもイエスは、

「本当のことを言うと、私が父の御許(みもと)に行く、

これは「十字架を通って行く」ということですよ、

私が去るということは、あなた方のプラスになる。私が行かなければ、助け主、聖霊は来てくださらない」

とおっしゃった。人は、「ヨハネ伝には十字架が無い」とよく言うけれども、全部隠されているんですよ。隠されているところをしっかりと捕まえないといけない。

「私が父の御許に行かないと、助け主は来てくださらない。私が行けば、これをあなた方に、父の御許から遣(つか)わす。助け主、聖霊、このお方がおいでになったら、世の人たちは罪や義や裁きについて、これまで肉的な判断、この世的な判断をしていたことに気づき、そして、それが間違っていたことがわかるんだ」

ということをキリストはおっしゃっています。

「罪とは何か」については、

「キリストを信じないということ、それがすでに罪だ」

と。別な言葉で言いますと、小池先生は、

「罪とは己(おのれ)自身だ」

とおっしゃる。旧(ふる)き己自身、これはキリストを受けつけない。肉なるものは霊なるキリストを受けつけません。ですから「罪につきて」というのは、

「我（キリスト）を信じないという、これが罪だよ」

と。パウロと小池先生の言っておられることが一致してきます。肉なる生まれながらの存在というのは、神様の次元を受け入れることができないから、「キリストを信じろ」と言ったって無理なんです。

《そういう人に対して、キリストを信じないからといって、いろいろと文句を言うのは拷問に等しい》

と、ヒルティも言っています。

《聖霊によらなければ本当にイエスを信じることはできない》

と。ヒルティは、「聖霊を信じるにはどのような準備が要るか」ということを『孫たちに幸あれ』の中に書いてくれていますが、そこには、

《罪とは、イエス様を受け入れないことが罪なんだ》

と書かれています。

「義とは何か」については、

「私が父の御許(みもと)に行くことが義だよ」

と。なぜキリストが父の御許に行くことが義なのか。十字架を通って行ってくださるからです。そこで、本当に、私たちの罪は全部許された。旧(ふる)き我は葬られた。「自己」が罪だったが、その自己が十字架で無くなった。無くしていただいた。それが義なんですね。ここにも十字架が隠されています。

「私が十字架を通って父の御許に行く。そのことでもう、あなた方は罪から解放されている」

でも、そのことがこの世の人にはわからない。

「裁きとは何か」については、この世の霊力、サタン、それが裁かれる。

「人を神から引き離している霊の力、これを粉砕することが本当の裁きだ」

と。だから、非常に深い根源的なことがここで語られているわけです。

聖霊、助け主、真理の御霊

「いろいろ言いたいことはあるけれど、あなた方は今は無理だ。しかし、真理の御霊(みたま)が来てくださるとき、あなた方を導いて、真理をことごとく悟らせてくださる」（ヨハネ16・13）

ありがたいですよ。我々は、「頭がわるいからだめです」などと嘆く必要はない。真理の御霊が来れば、御霊が天の世界をずっと案内してくださる。案内人となってくださる。だから嘆くことはない。

「どうぞ、助け主、聖霊さま。わが内に宿ってください。いつもあなたのところに居させてください」

と、その切なる願い。この聖霊というお方は、御自分から勝手な思いで語っていらっしゃるのではない。神様から受けたこと、霊界のキリストから受けたことを我々に伝達してくださるお方なのだと。聖霊がキリストの栄光を示す。聖霊が我々に本当にキリストというお方を見させてくださる。だから、

「聖霊によらなければ、本当に信じるということはできない」

と言われるのは、そういう意味だと思う。聖霊が栄光のキリストをお示しくださる。こういうふうに見ますと、いかに御思いが深いかということがよくわかります。

ロマ書における根源現実

使徒の書簡にいきます。ロマ書の6章、これはすごいですね。私が今まで申し上げてきたことを別の角度から言っています、「根源現実はこうだよ」と。

「およそキリスト・イエスと一つにされた私たちは」（ロマ6・3）

とあります。私たちは、水のバプテスマを受けなくても、祈りの中で本当に霊なるキリストを瞑想していく。難しいですか、霊なるキリストを瞑想するのは。

福音書の中に描かれているキリストの御姿。水の上を歩いて来られたキリストとか、病める人に手を置いて癒しておられるキリストとか、さまざまなキリストの場面があるでしょ。罪の女性が涙でキリストの足を濡らし髪の毛で拭ったら、

「あなたは多く愛したから、多く許されている」

とおっしゃったとか。そういう情景を思い描いて、その主さまが自分の前に居てくださると。水の上をずっと歩いて来てくださっている御姿とか、十字架上の御姿とか、そういったさまざまなキリストの場面を思い浮かべながら、そして、栄光に輝いておられるキリストを瞑想

して、そして祈りこんでいくような、そういうことを私は、

「キリスト・イエスのバプテスマを受けた我ら」

というふうに受けとりたいわけですね。

キリスト・イエスと祈りの中で、瞑想の中で合体してしまった我らは十字架の死と一つにされた。そのようにして我々はキリストと一緒に葬られ、その死と合体させられた。それは私たちもキリストと同じように新しい生命に、永遠の生命に、霊の生命に生きるためだと。

ロマ書6章5節に、

「我らキリストに接がれて、その死の状にひとしくば、その復活にも等しかるべし」（ロマ6・5）

とあります。接ぎ木されて、キリストという本体に接ぎ木されますと、キリストの樹液が流れて来る。そのようにしてキリストに接がれてその死の様に等しくば、復活にも等しい。祈りの中で、瞑想の中で、キリストの十字架の死に合わせられた。キリストの十字架で、その主の御姿と自分がしっかり合体したのだと。そのことをしっかり受けとったら、栄光の御姿で現れて来られた顕現のあの栄光のキリストともまた一つにされた。復活にも等しいんだと。

「我らは知る、我らの旧き人

これは肉なる人です、

これはキリストと一緒に十字架につけられた。それは、罪に支配される身体

ここでいう「身体」とは肉体のことです、

あるいはその作用といったものが滅びて、これから後はもう罪には仕えない。そのためだ。死んだ者は罪から免れている」（ロマ6・6）

と。だから、ここで言う罪は、自我とか肉なる思いとか、そういうふうに受けとっていただいていい。

「十字架で私たちはもう死んでいるんだから、旧い我から解放されてしまっている」

と。旧い我はもう不存在。神様の目のなかではもう、私たちは、旧い我は居ない。片付いている。十字架でもう無くなっている。不存在なんです。

では、何があるのか。

「栄光のキリストと一緒の私が在る。復活させられた、霊体に変貌した、そういう姿の私が神様の目に映っている」

と。そういうことをしっかりと受けとってほしい、というのがロマ書の6章です。

「**死にし者は罪より脱るるなり**」（ロマ6・7）

私たちはそのようにしてキリストと一緒に死んだ。そして、また彼と一緒に生きている。これは目に見えない事態ですから、「そうだ」と自分に言い聞かせるしかない。

「**キリストはあのような栄光の姿で現れてくださった。もう二度と死んだりなさらない。死はもはやキリストを支配しない。私たちも同じだ**」

ということを言っているのがロマ書6章です。

「**キリストが死んでくださったというのは、罪との関わりにおいて死んでくださった。旧い私たちを滅ぼし、旧い私たちを解放するために死んでくださった。そして、今生きておられる。永遠の実在者として生きていてくださる。神様との関わりの中で、神の中で生きてくださっている。そのようにあなた方自身も、罪という旧い己との関係ではもう死んだ者。神様との関係においては新しく生きている者。そのようにはっきりと認めなさい**」

ということを言ってくださっております。

「神様との関わりにおいては、キリスト・イエスの中で

「エン・クリスト（キリストの中に）ということ、キリスト・イエスの中であなた方は生きている。永遠の存在として生きている。そのように確認しなさい」

「はい、確認します」

と言えばそれでいいわけでしょ。神様の御言は断定なんです。「我々はそんな感じがしません」というような、そんなフィーリングは「肉」の世界のことで、神様の言葉は、

「**我が言は霊なり、生命なり**」（ヨハネ6・63）

と、絶対に貫く。愛の生命の言です。これをはっきりと受けとっていきます。そういう意味で、ロマ書6章は非常にすばらしいところです。

8章になりますとさらに、

「キリスト・イエスに在る者は罪に定められない」（ロマ8・1）

罪から解放されている。キリスト・イエスの中に充満している生命（いのち）の御霊（みたま）の法（のり）、御霊が生命にあふれ生命に生かすという、そういった法則が旧（ふる）いあなた方を解き放った。旧いあなた方を捕らえていた罪とか死とか、そういった暗黒の力からあなた方を解き放った。律法ではどうにもならなかった。だから、キリストがしてくださった。我々と同じ姿になってくださったキリストが十字架を引き受けてくださったことにより、あなた方はもう完全に解き放たれた。キリストが罪をお受けくださった。裁きをお受けくださった。それはもう、我々がもはや「肉」に従わず「霊」の生き方をしていく、天的な次元に新しく生まれた者として生きていく、そういうふうになるためにキリストは御業（みわざ）、十字架を全うしてくださったのだと。

「肉に従う者は肉のことを思い、霊に従う者は霊のことを思う」（ロマ8・5）

と。だから、「肉」のことばかり思っている人は、まだ肉の人なんですね。「霊」のことを思う人は霊の人なんです。

もし自分が依然として地上のものにとらわれるなら、それはまだ肉の人なので、早くそこから解放されて霊の人に切り替わらなくてはならない。

そして、切り替わるためには御霊をいただかなければならない。御霊をいただくには祈らなければならない。祈りは何かと言えば、帰依帰入。どこに帰依帰入するかといえば、

「お前を愛している。お前のためにすべてを成し遂げた」

という御言に。

「備えは全部できた。さあ、いらっしゃい」

という招きに。そこに、

「はい、ありがとうございます」

と入って行くのが祈りでしょ。そうしたら、いつしか解き放たれていることに気付く。

一人ひとりがその人らしく

「いつ御霊を受けました」なんて、私は全然わからなかった。小池先生ははっきりしていたんですね。まぁ、すごい聖霊のバプテスマを受けて、50センチほど空中に引き上げられて、猛烈に異言が流れて止まなかったという。ペンテコステのような体験をなさった。それはやはりそれだけの必然性があったんでしょうね。無教会という陣営の中で小池先生は苦しんでおられたから。

「何か足りない。何が足りないんだろうか？」

と。そして、

「足りないのは祈りだ」

と気付かれた。頭での祈りでない、全身からの叫びの祈り、それだということに気付かれた。

そして、九州でそのような祈りをしていた手島郁郎という人から懇請されて、九州で聖書講義をなさった。その最終日に天からのバプテスマを受けられた。それが九州の群れにとってもペンテコステだったということです。

その後、いろいろな展開があって、小池先生は手島さんとは別の道を行かれるようになりました。小池先生はどこまでも「霊の貧しき者」という道を行かれた。

小池先生が九州から東京に帰って、祈っておられたある日のこと、

「幸いなるかな、霊の貧しき者。天国はその人のものなり」（マタイ5・3）

という御言が臨んだ。はじめの聖霊のバプテスマというのは上からのすごい体験だったけれども、二回目のそれは本当に内的な体験です。

「恵福なるかな、霊の貧しき者。わが十字架によりて霊が貧しくされた者よ、小池辰雄よ」

と、御声が迫ってきて、

「全身がしびれて畳の上に平伏した」

と、よく文章にも書いておられます。

だから、聖霊というのは一回きりじゃない。何度も何度も、深められていくんです。そして、何も万人が同じ体験をしなくていい。その人その人にふさわしい道を行けばいい。

私は、そのような激しい体験はありませんけれど、でも小池先生は、「奥田君は大丈夫だよ」

と言ってくださった。自分でもそう思います。いつも平安がありますし、キリストがありがたくでしょうがない。「自分」ということにもうこだわらない。キリストがすべて。そして、キリストは愛そのものだから、何でもしてくださる。こんな素晴らしいお方はいらっしゃらない。私は誰の前でもそう言います。これが、天の次元に生きるという姿です。

そして、私は、地上のことも一生懸命にやります。どんなことでも、損得でやらない。それは、御意だと思うから。だから、私は、地上のことを一生懸命にやらない人はあまり信用しない。ただ「霊だ、天だ」と、うわついたことをやっている人は、宗教家かもしれないけれど、本当に聖書が求めているキリスト道、キリスト者の姿じゃないと思う。それは、それぞれの方が自分で確信を持っておられたらいいことですけれど、私に示された道というのはヒルティとよく似ています。ヒルティは、

《聖霊によって地上の仕事をしろ。神の力で地上の仕事をしろ》

と言っている。私もそのように導かれて、

「もはや、己に頼らない。ただ、ただ、キリストだけ」

と。「ただ、ただ、キリストだけ」と言っている人を人は裁けませんよ。善きにつけ悪しきにつけ、全部キリスト様なんです。キリスト様は、

「プラスもマイナスも全責任を負う」

と言ってくださっている。部下の功績を自分の功績とするようなこの世の上司とは大違いで

す。キリストは全部を引き受けてくださる。そしておそらく、向こうの国へ行ったら、こちらはキリストがやってくださったと思っているのに、

「お前、よくやったね」

と、御自分の功績を我々の功績にしてくださる。キリストというのはそういうお方ですよ。ひとりじめなさらない。私たちは、

「主よ、あなたの栄光です」

と言ってるけれど、向こうは、

「いや、お前はよくやった。お前はこんなに素晴らしいことをやった」

と。一人ひとりにものすごいご褒美をくださる。そのようなご褒美をいただくことが我々の喜びであって、地上でのことは、まぁ大したことではない。それくらいの気宇壮大な、天の次元に生きる人になってほしい。試験に通ったとか通らなかったとか、永遠の世界から見たら大したことじゃない。だから常に、通ってもすべっても、何をしても、

「キリストに在って、御意(みこころ)が成りますように」

と。それにどこまで徹するかです。クリスチャンといえども、都合の良いことは受け入れるけれども、都合の悪いことは否定するということになりがちです。でも私は、自分のマイナスも含めて、全部そのまま、あるがままに受け入れる。そして、全部を主に預けます。そこまで徹しないと、この世は生きてゆけないと私は思っています。都合の良いことは神の栄光

で、そうでないものは、「何でだろうか？」と悩む、それではしんどくてたまらない。

だから、私はKさんにお手紙を書きました。お孫さんのMちゃんが交通事故でお亡くなりになった、9歳5か月で。家内は、「まるでヨブ記ね」と言った。義人が苦しむという。私はKさんに、

「理由は考えないようにしましょう。神様の深い御思いを、人間の思いで勝手な解釈をしてねじ曲げる、それはよくない。すべてをそのまま受け入れよう」

と書いた。それが私の心境なんです。この不安定な世の中で、

「これは何でだろうか？　神様はどんな思いでこうなさったのだろうか？」

とか、私はそのような忖度(そんたく)をしたくない。

キリストが愛であるということ。キリストが私たち一人ひとりを、ご家族の一人ひとりを、命がけで愛しておられるという、その愛。それは揺るがない。それで十分です。

この見ゆる世界は、限られた世界なんです。見えない神様の世界は無限無量なんです。無限無量、その中で我々は生かされている。

「生くるも主のため、死ぬるもまた主のため」

と。生死全部をキリストに預ける。そういうふうに皆さん徹してください。それに徹するには、もう、新約聖書に精通してください。暗記するのではない。新約聖書が自分に刻み込まれて血肉になることです。そういう読み方をしなければ、百回読んでも二百回読んでもなお

足りないですよ。

「主さま、すごいですね。あなたの御言は生きています。すごいじゃないですか。ヨハネとパウロは違うのに、同じことを言っているじゃありませんか。ヨハネはこういう光で言っている。パウロはこちらから言っている。結局同じことを言ってくれている。ヨハネとパウロが一つになりました」

「そりゃ、そうだよ。聖霊が導いておられるんだから」

と。そういう角度で、表面的な食い違いとか、そういうことはどうだっていい。

「本当の永遠の世界の現実、神様の愛の世界の現実、愛の御思い、御霊の思い、それを何とかして私たちに伝えたい」

と、もう呻いているんです。だから、こことあそこがどう違うとか、聖書研究をする人は興味あるらしいけれど、永遠の生命とは関わりないことです。聖書は本当に――聖書の言葉は暗号です――限られた言葉を通して、矛盾だらけの言葉を通して、その奥からグッと響いてくるその生命に触れること。これが大事なんです。

聖書の言葉というのは、それらを通して本ものが語られている。愛が語られている。奥から語りだそうとされているものの断片が、聖書には記されている。その断片どうしを比べて、ここが違うとか、そんなのはナンセンスです。

生命を受けとること。ひと言でも生命があるんです。

「我が言は霊なり、生命なり」

なんです。だから、私たちは、そういうふうに御霊のキリストに直結する。聖霊、助け主、真理の御霊、この方を遣わしてくださる。それがキリストの御思い、天の父なる神の御思い。そのために、キリストは必要なことをすべて地上で成し遂げてくださった。ヨハネ伝17章にありますね。

「私は、行うようにとあなたが与えてくださった業を成し遂げて、地上であなたの栄光を現しました。父よ、今、御前でわたしに栄光を与えてください。世界が造られる前に、私がみもとで持っていたあの栄光を」（ヨハネ17・5）

そういうキリストの祈りがズンズン響いてくる。もう、ラブレターですから。キリストが我々をいかに大切に思ってくださっているか。そういうことですから、どうぞ大胆に、大胆に愛を信じていってください。

それでは、この程度にして、ご一緒に祈りましょう。

祈り

主さま。ここに来られたお一人お一人に、あなたが百％臨んでください。聖霊となって、お一人お一人の中にお宿りください。

主さま、あなたがいちばん求めておられるのは、

「我が霊を受けよ。父の御許より私が遣わさんとする助け主、聖霊、これは真理の御霊であるから、これを受けとるように」

と。あなたの分身であり給う聖霊、この生命の御霊、愛の霊、生かしてやまない霊、生命そのものであり給うこの御霊が、ここに集われたお一人お一人と深く結合し、お一人お一人の霊と一つとなって、どうぞ天界へと導いて行ってくださるように希い奉ります。

「活かすものは霊なり、肉は役立たず」

「肉の生き方ではだめだよ」とおっしゃった。霊にあって、この賜わった肉体をも、あなたは本当に生かしてくださいます。主さま、聖霊が宿ってくだされば、死すべき身体をも生かしてくださいます。我が思いを全部あなたが清めて、あなたの御旨にかなうようにと生かしてくださいます。

主さま、

「我、主とともに十字架せられたり。もはや我生くるにあらず。御霊のキリスト、我が内に在りて生き給うなり」

と、どうぞ今、その現実をここに成就してください。主さま、我々心を一つにして、あなたに希い奉ります。主イエス・キリストさま、

「我が言は霊なり生命なり」

とおっしゃった主さま。必ずあなたは成してくださいます。感謝します。ここに集われた祝福された方々を、あなたは本当に抱きしめ、

「我が愛し子よ」

と。そして、本当にあなたのものとして、永遠から永遠まであなたと共に歩んでいくことができますように御助けください。

小さき者、病める者、力無き者にもあなたは生命となって宿り、生命の霊となって生かしてくださることを感謝いたします。

主イエス・キリストの尊き御名によってこの祈りを御前にお捧げいたします。アーメン。

〔『聖霊・助け主・真理の御霊』２００７年９月６日京都キリスト召団発行より転載〕